

公表

事業所における自己評価総括表

○事業所名	輝HIKARIみらいキッズ			
○保護者評価実施期間	2026年 2月 20日		～	2026年 3月 5日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	33	(回答者数)	27
○従業者評価実施期間	2026年 2月 20日		～	2026年 3月 5日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	5	(回答者数)	5
○事業者向け自己評価表作成日	2026年 3月 28日			

○ 分析結果

	事業所の強み（※）だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	児童発達支援を利用していたお子さんが小学校入学後も慣れ親しんだ環境・スタッフ・仲間の元で放課後等デイサービスへ移行できる体制が整っており、環境変化による不安やストレスを大幅に軽減できています。	吊り遊具（ブランコ）や跳び箱、サーキット運動などを通して、楽しく体幹やバランス感覚を養い、座勢の保持や集中力の向上につなげる工夫を行っています。	授業中の離席防止や話を聞く姿勢、友達とのコミュニケーション（貸し借りや順番交代）など、学校現場で直面しやすい困りごとに特化した小集団プログラムをさらに強化します。
2	各専門スタッフが連携し、粗大運動（吊り遊具やサーキット等）から微細運動（ハサミ、書字、箸・靴紐等）、言語・コミュニケーションまで、お子さんの苦手さに合わせた丁寧なチームサポートを実施できています。	ハサミの使用や塗り絵、感触あそび（スライム作り等）など、手先の器用さや自己表現力を育む課題を段階に合わせて提供し、「できた」という達成感を積み重ねられるよう配慮しています。	小学校入学や学年上がりのタイミングにおいて、学校での様子や配慮事項を共有・連携する機会を増やし、地域全体でお子さんを支えるネットワークを深めます。
3	ひらがな・数字の習得や着替え・片付けなどの身辺自立、集団でのルール遵守や日常の掃除など、小学校低学年に必要な生活習慣や社会性の土台を着実に育てています。	帰りの会の前のみんなでお掃除や、おやつ前後の手洗い・準備など、実際の生活場面に即したプログラムを日課に組み込み、自然な形で習慣化を図っています。	理学療法士や作業療法士、言語聴覚士などの専門的視点に基づいた家庭での関わり方や体の動かし方のコツなどを、日常の送迎や面談を通してよりわかりやすく保護者へ還元していきます。

	事業所の弱み（※）だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	発達段階や体の大きさが異なる特別支援学校の児童と地域学校に通う普通級、支援級の児童が同じ空間で活動する時間帯において、双方の安全確保とそれぞれの課題に集中できる環境づくりに一層の工夫が必要です。	未就学から低学年までが利用する多機能型事業所特有の動線・空間制限 限られた事業所スペースの中で、動的な運動療育と静的な机上課題・学習支援を並行して行う際の時間配分や空間区切りの難しさがあるため。	空間区切り（パーティション等）やスケジュール調整による環境の最適化 明確な視覚的区分けを行い、個々の児童が周囲の刺激に惑わされず課題や活動に没頭できる環境を再整頓します。
2	ブランコや跳び箱などの大型器具を用いた運動や感覚刺激を伴う活動において、安全面の配慮を徹底するとともに、感覚過敏を持つお子さんへの細やかな配慮の標準化が課題です。	個々の発達課題や感覚特性の多様化 粗大・微細運動の苦手さ、書字や対人関係の課題など、お子さんごとに抱える困りごとが多岐にわたり、マニュアル化しづらい面があるため。	理学療法士・作業療法士・言語聴覚士等が講師となるショート研修を定期開催し、具体的な身体アプローチやコミュニケーション手法のノウハウをチーム全体で共有・標準化します。
3	多職種が在籍している強みがある一方で、各専門職の視点や技術を全スタッフが理解・実践できるよう、日常的な情報共有や研修の仕組み作りが必要です。	日々の業務に追われ、専門職同士のカンファレンス時間の確保が難しいこと 送迎や直接支援の時間帯が多く、スタッフ全体で専門職のノウハウを深く学び合うまとまった時間の確保が容易ではないため。	学校の宿題サポートに加え、定規やハサミの使い方、体操の動きの補助など、小学校低学年で直面する具体的な「ニガテ」に対応したプログラム・教材をさらに充実させます。